

タイトル	翻刻『八雲路日記 三上』(一)
著者	武田, 佑希子; TAKEDA, Yukiko
引用	年報新入文学(21): 180-198
発行日	2024-12-25

翻刻『八雲路日記 三上』(一)

武田 佑希子

『八雲路日記 三上』は、安芸国山県郡本地村（現・広島県山県郡北広島町）の国学者・後藤夷臣が天保四年（一八三三）六月二十三日に安芸国を出発した出雲・因幡方面の紀行文で、出雲のほか、因幡や近江に訪れ、最終的には紀伊国に至る。本稿は、東京大学国文学研究室所蔵（本居文庫）写本『八雲路日記 三上』（以下、本居文庫本）を便宜上分割して翻刻した第一である。

後藤夷臣は、本居宣長の門下であり後に養子となり本居家を継いだ本居大平に学んだ。櫻園を号し、安芸国のみならず出雲・伯耆・石見などを巡り、各地で『古事記』や『古今和歌集』を講じた。

夷臣は、天保四年以前にも出雲を訪れており、天保二年（一八三二）、出雲大社に六月四日より七日間出雲大社に参籠した際には『八雲路日記』を書いている。天保二年の『八雲路日記』は、上下巻に分かれており、上は安芸国出発から出雲に至り帰郷するまでの紀行文、下は出雲大社にて詠んだ百首歌や長歌が納められている。自筆本が本地村近く壬生村の神職であり夷臣の門人の井上頼定の元に渡り、翻

刻資料が『千代田町史』に収録されている。今回翻刻を行った『八雲路日記 三上』の本文中に「天保五夏のころ奇怪のありし事の話は、八雲路日記四の巻にいふへし」とあるが、現在のところ『八雲路日記』と『八雲路日記 三上』以外は未詳である。

『八雲路日記 三上』は、写本二点が確認できる。一点目の本居文庫本は書写者不明である。二点目は『旧島根県史編纂資料 近世筆写編九』所収のもので（以下、旧県史版）、奥書には「天保十二年辛丑七月八日 富永芳久」とあり、その写本を大正九年（一九二〇）十二月二四日に島根県史編纂掛が謄写したものである。富永芳久は、出雲大社の社家に生まれ、千家俊信や本居内遠の門で学んだ。芳久の名は、『八雲路日記 三上』の本文にも確認できる。夷臣と芳久の出会い、天保二年（一八三一）に夷臣が出雲大社に参籠したことがきっかけである。本居文庫本と旧県史版それぞれ、多少の校異を除き同じ内容であるが、芳久による写しは、夷臣が因幡国に入ったところで書写を終えている。芳久は主に出雲国に関する部分の書写にとどめているが、『八雲路日記 三上』における夷臣の旅はその後、因幡国から但馬国へと続いていく。終盤では、但馬・美作・紀伊などの埋葬方法や死体にまつわる不思議な出来事に着目している点も含め、夷臣の思想を知る上でも重要な資料といえよう。

さて、芳久と同じように日記中に名前が登場する人物で注目したいのが松江の商人であり国学者の渡部彝である。渡部彝は、出雲の神社三百九十九社を掲載した案内記ともいえる『出雲神社巡拝記』（以下、巡拝記）を夷臣の『八雲路日記 三上』の旅と同年の天保四年の冬に刊行したとされる。夷臣が『巡拝記』の内容をもとに実地で検証を行ったとは考えづらいが、『八雲路日記 三上』内で夷臣が渡部彝の説を引用している文章と『出雲神社巡拝記』の文章に一致する箇所が見られた。『八雲路日記 三上』は、前掲

したように「天保五夏」の出来事に対する記述があることから、本日記が著されたのは天保四年の旅を終えた後、天保五年の夏以降であると推測される。そのため、夷臣が『八雲路日記 三上』の執筆にあたり、渡部彝の『出雲神社巡拝記』を参照した可能性は十分あり得る。

夷臣は、『八雲路日記 三上』の目的について、式内神社の聞見録ほか、「其国々にて怪き奇きと思ふかきりは自ら往見てかくしらせるなり」と記す。その言葉の通り、夷臣は、大平門下として『古事記』や『万葉集』などのテキスト解釈から自らの学問を深めていくだけでなく、出雲の神官や伊勢の国学者たちとも交流を持ち、あるいは遊歴した先々で見聞した葬送儀礼など土着の風習や死者に関する話を収集していった。そうして、夷臣は宣長国学の立場とはまた異なる視点から、神代の跡を各地に探し求めたのである。

(たけだ ゆきこ・文学研究科日本文化専攻修士課程二年)

参考文献

- 桐原朋夫「皇学者後藤夷臣(一)」(『飽薇』飽薇同好社、第十卷二号、一九三四年) 一一八頁。
- 桐原朋夫「皇学者後藤夷臣(二)」(『飽薇』飽薇同好社、第十卷三号、一九三四年) 五一一三頁。
- 小林准士「『延喜式』と『出雲神社巡拝記』」(島根大学附属図書館『淞雲』第六号、二〇〇六年) 一〇一—一〇二頁。
- 新見吉治「後藤夷臣」(『尚古』第一年第五号、一九〇七年) 五—一〇頁。

新見吉治「後藤夷臣（承前）」〔「尚古」〕第二年第一号、一九〇七年）五十一〇頁。

鈴木理恵『近世近代移行期の地域文化人』（塙書房、二〇一二年）

関和彦「渡部彝の復権と周辺の人間関係」（松江歴史館『松江歴史館研究紀要』第二号、二〇一二年）、

一一一五頁。

千代田町役場『千代田町史 近世資料編（下）』（一九九〇年）

名田富太郎『山県郡巡り道中記』（広陵社、一九三一年）五十二五頁。

森本国松編『芸備郷土史目録』（第三書房、一九三四年）六七頁。

凡例

本文表記については、読解の便宜のため次の方法をとった。

1. 漢字は原則として新字体に統一したが、一部の漢字は原本の用字に従った。
2. 変体仮名は原則として平仮名に改めた。
4. ルビは、原本によるもの以外は打たなかった。
5. 本文中に適宜句読点、中点（・）を加えた。
6. 二行割注は「」で示した。
7. 明らかな誤字・脱字等は右傍に（ママ）と傍注した。「完道」については誤字ではないが（ママ）とした。

八雲路日記 三上 天保四年

夷臣

今年も出雲の大神に詣てむといへは、兎玉利足も同くまうてむといふに、六月の始より、けふや出なむ、明日やいそきなむといふに、利足か母病にいたつきて、命さへあやうかりければ、とかくして日を過たり。今はとて、けさ一人具しておのれはかりいてゆく。けふは六月廿日まり三日也。其夜は新庄の里の友かりに宿れり。此里は、昔吉川氏の知ませし地にて、小倉山日ノ山などいふ大城の跡あり。此処の治功大明神は、吉川興経主の霊を祭て今も岩國の周防君より厚く祭り給ふ。神主三上主わか旅の宿りを訪らひて、夜終物かたりす。当社に風吹の獅子といふものありて、いつにても社外に持出れは

必ず暴風おこりて災ひありといふもかしこし。其里より石見国出羽イツハの里にこえて竹崎孟雄かり訪らふ。かたみにたえたることなといひて、よめりしうたあまたとしへたてし秋も村きもの心はかれぬ言の葉の友

一日あるしと、もに鬼城門オニノキトの神社に詣。いともかしこき大きないは、高聳てたちならひたるか末にて往合たるぞ。此社の号の故よしには有けり。祭れる神は貴船の大神とそうけたまはる。祭日は十一月十一日。この竹崎家に執行へり。里の家々よりみきね米さかしねなといふ物をこの家に持参るを、神供に調、酒に讓して奉るとなむ古言の残りたるもおかし。また当家にむねと仕へ奉る加茂神社は、延暦二年にはひそめしといふ。今の宮殿は吉川基春奇附の造営なり。御殿幣殿いかめしく、八字の末社等古のまゝなり。神宝の中に古き弓一張矢四筋あり。珍らしきものなり。また月守何某、朝鮮より帰りし時、奉りしといふ鎚二筋あり。今の世には見なれぬ甚なかき物なり。永祿・天正のころ遠近の諸将より奉し物願書等あまたあり。かくて此家を出て、往さまに魚切といふ処あり。こは左右山高く巖聳へたる中らに川あり。岩間を往、水のたきち落るところ五百歩はかりかほと流れと、ろきて、いともかしこし。於此御社あり。石折神根折神を祭れり。

こゝを過、河本の駅にいたる。こゝは江の川の渡瀬なり。祖式の里片岡善雄を訪らふて宿る。こゝの神主潮正輝其外これかれきと、ふらへり。人々の乞

新勅撰

朝毎に石見の川のみをた
えず恋しき人にあひ見て
しかな

よみ人不知

るまに／＼歌なとかうせちす。温泉の里にいきて湯浴せむと思ふ。始てこえ
行山路なれば、おほつかなく侍らむとて、善雄かあなひして往。この道次西
田の里は、葛根を採て葛粉とふ物を製て、里人の薬とす。温泉の津の里にい
たり。年ころ吾宿れりし福光屋とふ客舎にいりて宿れり。吾国の人ともしる
しらぬあまた湯浴にまをれるかあへりけり。此名の海浦は北海路を通ふ百舩
の泊る港にして、商舩漁舟の出入の数多く、商人あまた賑へり。旅枕こゝに
もあらぬに善雄来訪へり。かれと夜一夜こゝに宿りてつとめて打連ていてゆ
く。湯里にいたり、霹靂神社に詣。神主竹内正温を詣らふ。何くれと物かた
らひて神小路_{カミコヂ}琴ヶ浜を見にゆく。こゝの浜の真砂は人の往まに／＼響音なひ
て琴の音なせり。あやしく珍らし。上野朽子谷などいふ処をすく。邇摩郡佐
間村銀山とて、銀鉱堀処にいたりて天野檢校か家に宿れり。主のこへるまゝ
によめりしうた

とひ来ればうつも賑はし栲角のしろかね山の君かやとりに

この里は大永の此より銀を堀始て、今も家居あまた立並て賑はへり。山吹の
城跡は、此家に向ひたる山にして松柏生繁れり。大森は此里に連りて任国の
君おはして、仕人たちあまた家居あり。こゝに五百羅漢といふもの石もて彫
て祭れる。舎も岩壁の平面を穿て、石の葩さしてあり。此もの諸国に多かる
ものなれとも、石もて造りたるは珍らし。久里の里をすく。東南なる山に、

万葉二 人丸
大船のわたりの山
同十
妹か袖さやにも見えずつ
まこもる屋上の山

佐比売山

出雲風土記

神名式

佐比売山神社

今三瓶山云

和名抄

波祢

同

静間

神名式

静間神社

大城の跡見ゆるは久里隆政か住しあとなるへし。此わたりより渡山八上山見ゆる大田の里石崎賤鷹を訪らふ主のうた

露ふらむむくらふ庭のせめてはと君なくさめに鳴むしもかも

かへし

たつねこし吾をなくさめに鳴虫をきゝすてゝ行旅そわひしき

名におふ佐比女山はるかにあふき見る。いとけうあり。昔、西行法師此山を見てこゝにてうたよめりしとて、今も西行庵といふ室あり。遠近の風流雅こゝにきて風流の円居すといへり。羽根の里を過ける時、満蓮の神社をたつねて詣つ。こは昔大江元就大人、此社に一夜陳し給ふことを思ひ出でなり。其比羽根義国といふ人のありしもこの里人なるへし。此処より静間といふ処をたつねて静間神社に詣(祭神大己貴尊少彦名命)。抑この社は、海岸のさし出たる岬に巖聳たる処ありて、其処の窟に御社はたゝせ給へり。かくふりはへて此社に詣る故よしは、万葉集なる賤か窟の歌によりて考ることのあればなり。其は出雲の国市畑寺薬師の段にいふへし。かくて出雲国にうつり、多芸三里浜などいふ処を過て園神社にまうつ(祭神八幡瑞臣津努命)。大汝持大神の国造らしゝ時、御功ありし神にてこのわたりを園の長浜といふ。杵築より引つらなりたるいと長き砂山は、大神国曳来ませし時の御綱のなれる山なり。長く引延たる砂山の清らなるに、古松生繁りて御社いかめしく建給ひてたふと

和名抄

許築とある許は杵の誤字也

拾玉 慈鎮

はるかなりいくよの雲に
なれぬらん出雲の宮の千
木の片そき

家持歌集

白真弓いつもの山はとき
はなる命のあやな慈つゝ
あらむ

元徳は後醍醐帝即位十一年なり

き。いはむかたなし〔委しき事また園の長浜の図など左によりて考へたる事は出雲風土記図考にいふ〕。神主園光行家に宿てよめりしうた

ふみゝれはいよゝたふとし神の代のそのあとしろきそのゝ長浜

けふは八月五日。杵築社の神祭りなれば、主ねもころにとゝめしをしひて出行、杵築にいたり。あひしれる人の家にいりてやといれり。湯浴髪けつりなとして大前に詣。日中過るころ北嶋国造昇殿あり。大庭にて神あそひの舞あり。夕方坪内主を訪らふ。くさくさあるしなし給へり。

此云、当社神宝琵琶の事禁秘御抄云、唐土より持ふりし二面の琵琶、玄上・谷蔭の内にて、玄上は朝廷にてはやく失ひぬるを、紫藤の谷蔭はいつのころよりか当社の御内殿に納りて重き神宝となりしを、文政十二年十一月此琵琶朝廷へめされて叡覧にそなはり、しはらく朝廷にとゝめ給ひしを、翌年七月三日より京都の大地震希代の珍事九月ころまでも止りしは、またく大社神宝の琵琶を朝廷にとゝめ御返納なきを神のおしませ給ふ御祟りなめりとて、同九月下旬に御返し遊されしとなむ。按に、琵琶は希代の珍物にして則琵琶の小舌紫藤なり。撥面に竜虎の画あり。

裏ウラに元徳元冬といふ事のありしよし。

是は琵琶の胴と合せたるを、朝廷にて披き見られし時の写しなりとて奥にする。是を以て考るに、後醍醐帝との国ちかくわたらせ給ひし時な

と、当社に納奉給ひしものならむ。

琵琶の裏に

南林妙音火災

名游道

元徳元

南無虚空蔵菩薩

冬之比作

冬の比作とあるは修覆なるへし

類聚歌林

順徳院

八雲たつ出雲の子らか黒髪はよし野の川の沖になつさふ

万葉十二

真菅よし曾我の河原に鳴千鳥まなし吾せ子わかこふらくは

享保の比

冷泉宗家卿の歌

木の間より月は出雲の御崎山神代の秋の光みのらむ

神代紀

素戔嗚尊居熊成峯而遂入於根国云々

さて此琵琶朝廷より御返納の節、破損修覆遊され仰紙一紙武家伝奏議奏連著のこと黄金許多御奇附の事など、くはしき事は大社実録〔夷臣著述〕にいへり。此神宝のこと普く世にきこえてかくれなく、またあらぬことなど人のいへる事もあれば、かくこゝにいさゝかいへり。

次の日も大前に詣。そのちなみに能野河を渡りて芳久主を訪らひ、帰るさには須賀河を渡りて西村主その外しれる人これか道とかわらふ。さて鰐淵山に詣。左りのかた御崎山なり。けはしき山坂を登り、高き峯をこえ、深き谷に下りおくまりたる処に寺院あまたあり。奥の院と云ふは左右岩壁の奥に曝布有。滝の窟に一字ありて、滝水は庇の前に落るなり。和田の坊といふに入て宿る。こゝの摩多羅神と称る神社は、祭神建速須佐之男命をいふ。風土記に云神魂社を是にあつるはいかゝあらむ。或人云、昔年当山にて人の頭骨の大き六尺ばかりなるを、ほりいたせり。人々怪て、須佐能男命の御ならむと恐て今の社を建ていはひ祭れりといふ。また神代紀云、鰐成嶽はこの鰐淵山の事なりと云。この両説はうけかたし。風土記を考るにこの鰐淵山は、西方日の御崎

より東のはて三穂か岬まで引続きたる山にて大汝持神国造らし、時、新羅国高志国より引来給ひし山なり〔委しき事は出雲風土記図考に云へし〕。須佐之男命、此国にき給ひて八雲立の神詠をものし給ふ時は、此山はいまたなかりしなり。されは鱈成嶽は異地にして、また須佐之男命の御あるへくもあらず。また、此山にて天保五夏のころ奇怪のありし事の話は、八雲路日記四の巻にいふへし。是より十六嶋ウツフレヒを見にゆく。此処は海苔の名産なる事、世人よくしれり。其嶋は雲手嶋・京嶋・神伝嶋三・大黒嶋・水尾嶋・大平嶋・鯖口嶋・内ノ大平嶋・殿嶋・京口嶋・小嶋・苔福嶋・根瀧嶋・山柄嶋、この十六嶋ウツフレヒといふは、或書に浦人海苔を採に藻屑貝殻などつきたるをうちふるひて採故に、かの海苔のよく生る嶋の数によひなれて、終に十六嶋の字をうづぶるひといふといへり。さもあるへし。都てこれらのこと文字と訓とことなること、伴蒿蹊か考へし事あり。そはこゝにはいはず。此処より松浦といふ処にいつ。また多久村にこゆ。雲見峠といふ山路に石神といふあり。高一杖はかり。周もまたおなし。其側に小石神といふありて、数百余同形なるもの並へり。里人は建石と名もいふ。国人渡邊某云、多芸津彦命の神跡なりといふはいかゝあらむ。神名式、常陸国大荒磯崎薬師菩薩明神社同那賀郡、また能登国なる石像の神社いづれも此処なるとまたく同じさまなれば、こはうつなく大汝持命少彦名命の神跡なるへし。また仏家の薬師仏といふものに、

和名抄

意宇郡完道今訛てシンジ

ユウミ云

神名式同郡

完道神社

出雲川 叔蓮

出雲深きみなどをたつぬ

れははるかにつたふわか

のうら波

皮河

神道百首兼邦

和らくる光りはなほそあ

らはるゝひの川上の出雲

八重垣

鳥上嵩

神代紀一書云素戔嗚尊云

東渡到出雲国簸川上有所

鳥上峯云

市畑寺

出雲風土記云神名火山葦

原神社

薬師神を混合したること、次の市畑寺の段と考合して其誤れることしるへし。

此山より完道湖眼下に見ゆ。こは往古の海の残りにして、西は平田より東松江の城下まで豎六里はかりの湖水なり。かの鳥上嵩はこの湖の南に高くそひへたる山なり。大蛇の住し皮の河は、この鳥上山より湖水に流れる河なり。或書に、完道畦地山また完道遠江守正隆といふ人の見えたるも、此わたりの人なるへし。是より市畑寺に詣。この寺正面の一字に薬師仏をいはひ祭りて、遠近の眼を煩ふ人、この仏に乞禱て神験いちしるし。この東の脇の小社に少彦名命を祭り、西脇の小社に葦原醜男命を祭る。門外に坊舎あり。この寺の古きものに、市畑神領と書たるものあるよし或人いへりましゝ。この仏進をむねと祭る日は、海水ウシホを奉るとそ。里翁のいへらく、本尊薬師仏マヤ往古完道の湖中より出現ましゝて、当山の半途に岩窟あり。其処に御鎮坐ましゝを、後に今の堂宇を建て祭れりと云。其始て御鎮座の窟といふはいさゝかなれとも、いかさまにも古き神跡とおほしくて、窟中に小祠あり。前に注縄引延てあり。倩、当社の事跡を按ふに、中昔より浮屠の輩神社と仏宇にとりなして、あらぬ名ともをおほせまつりて、おのかしく祭ることあけてかそへかたし。当社もうつなく大汝持命少彦名命の御鎮坐にして、諸人の病患を救ひ給ふこと眼病のみに限るへからず。ことに、この国は此二神の御本国にましませは、万葉集なる大汝持少御神の賤の窟とよみしは、きはめてこのいはや

の事なるへし。この静の窟のこと、石見国邑智郡岩屋村に静かいはやと称するものありて、小篠敏〔濱田候の儒臣明和寛政のころの人にて鈴の屋の弟子也〕鈴の屋翁に物語してより、翁も静の窟はこれなめりといひ置れたり。伴蒿蹊も此説を諾へり。抑、静の岩と称るもの播唐国生子窟これ世の人のしる処なり。これも上古の神作にして、其造れるさまもめつらし。また、この窟作らし、時の石屑イシヅクは、遙遠き処に捨たりといふ。こゝにも、かの二神をいはひ祭るよしの伝なれば、静か窟といはむもまた諾なり。石見国静か窟といふ処、おのれ往て見しに山の麓に小社有て、其山の頂に登るところに中の窟奥の窟といふあり。いづれも聊の自然の窟にして神祠もなし。岩屋村の号の故よしは何れに拠てなつけ、む。いふかし。然に先年此辺山を洗流して、鉞砂コテツをとるもの山の崩れより、長尺はかりの薬師仏の銅像を掘出せり。是なむ静か窟の神像なるへしと、かの社内にはひ置しに、自然に蟋蟀コホロキの如くなる黒き虫出て、この銅の仏像を喰て一年余にして、竟に残りなく喰尽せりと云り。此事實は、この出羽の庄に濱田君より置給ふ出羽組代宦何某か其ころ書たるものに誌せり。其後は、当社内に神像を斎置ことなしと云り。いと怪しき事なり。此社をしも静か窟の真跡のこと敏かいひしも年ころ諾はれ、かくく待りしに同国同郡のうち赤谷アカヤといふ処あり〔安芸広島より石見濱田府往通の道なり〕。此処より水源凡五十丁はかり登りて、京か原といふ処あり。其山

の南表は、安芸国山県郡高野村才乙村タカヌ サイオツに峯を隔て境をなせり。則、山陰山陽の坂合なり。頂頭より十丁はかり下りて、北の方一山一面の岩壁なり。その平面に方面二杖はかり高九尺余奥深杖余其内角面にして彫磨人力の及ふへくもあらぬ神作の窟あり。其岩屑と思しきもの六七丁はかり山を隔て、谷底に捨たり。是全く生子窟と同じさまなり。是なむ往古かの二神の造給ひて鎮坐まし、静の窟なるへし。然れども此処はいと深き山奥にして、秋の末より春のすゑまで雪のためることなく後世詣る人もなかりつらむを、今の岩屋村にいさゝかの窟のありしによりて、小祠を建、此御神をうつし祭りしなるへし。今は京か原の窟はしるへもなくなりしなり。又、前に云、安濃部静間村静間神社是も、静の窟の真跡なりとこのわたりの人はいへれと、上古の跡いつれか真の跡ならむ。後世の心もて、強て定るはいとおほつかなき事にてそあれされども、今試に強ていは、またくこの市畑山の岩屋を二神の鎮坐根元の静の窟なるへき。前にもいふことく、今は仏を祭といへとも、全神社にまきれなき事は神領と云。海水を奉ることなど、古き伝のいちしるし。また当社に乞禱て、諸病に験あること仲子の及ふところにあらず。おのれ前に、杵築の社頭にて百首歌よみて奉りし時、八雲立の御神詠の歌の文字を一字宛、始に置いてよめりし三十一首のうちの中るの字

瑠璃色ウスシにひかるほとけの名といふはなへて薬師クスシのこれの大神

とよみしなと思ひ出されてかしこかれども、今は二神の始て鎮坐て万人の病患を守護給ふ静の窟の根元はこの市畑山の窟にして、石見国なる京か原のいはや播磨国なる生子窟は、後に作り坐しゝ処なるへし。さて、岩屋村の社静間の社は自然の窟によりてうつし祭りしならん。此類なるあるへしと考へ定つ。佐陀の御社に詣。祭れる神は伊邪那岐神・伊邪那美神・天照大御神・月夜見命・須佐之男命を合せ祭る。或は云、四坐。渡邊王云、当社祭神古書に神御霊命の子蜺貝比女命加賀の〔加賀のこと次にいふ〕久計止にて産坐る佐陀大神とあるは、猿田彦の命の御事なり。当社は、猿田彦命と大田命と御繩張の宮建にして、こゝにとゝまり給ひぬとあり。然れば、一説四柱のうちならんかと云り。当社も、杵築の大宮に次て嚴重なる御社なり。また、当社に神詠とて国土の広きあら野を田となして鍬の御矛や露の玉米といふうたに、神人の鍬もたる像など書そへて木に彫、紙にうつして信心の人にあたふる也。こはかの大成経を偽作せし美濃国潮音か偽りて作りまうけし歌なりと云り。いとまかしこし。かくて水の浦にいたり、久計門の社にまうてむとて、其夜はそこになも宿れり。其夜、但馬国人北垣〔通称和平〕方照、枕をならへてあひかたらへり。此主は、年ころ杵築の大神を信て、近きころ吾山に御社を建ていはひ拝り。つとめて方照主とゝもに、海士の小船にうち乗て、久計門の浦にゆく。久計門(マヤ)の浦にゆく。此処は、北海にさし出たる海涯に大き

久計止
書紀に洞海^{ウツミ}万葉に木間立
久々霍公鳥まし、百舌鳥
の草久吉なとみれ今云く
ぐるる也

鱸
古事記云栲繩之千尋繩打
延為釣海土之口大之尾翼
鱸

神名式云
揖夜神社
同石社
韓国伊太氏神社

なる窟ありて、窟の中に船を乗いれて奥に入、彼方此方と漕めくり、またこ
き出して高天原古久計止なといふ処に詣。神名式に云、加賀神社是なり〔今
は社殿はなし〕。祭れる神は、蜃貝比売命・天照大神なり。こゝの窟の中に、
天井よりしたゝり落る水の露を持帰、乳汁の少き婦女にあたふれば、必驗あ
りて乳汁いつるなり。渡邊主云、或書云、加賀神崎久計止窟高十丈巡五百歩
東西北は通れりと云〔三方に海に通穴の入口あり〕。猿田彦命、此窟にて生
給ふ時、御母蜃貝姫暗き窟なるかなと宣て、金弓にて射通し給へは、明りさ
して〔今の北の方の穴なり〕かゝやける故に加賀といふと云。久計止とい
ふ号は、窟の中を船にて三方へ往ぬける故に潜門^{カケト}なるへし。

さて此処より方照主は三穗の神社へ詣てたる。おのれは別れて松江の方にゆ
く。この近きわたり津の森といふ有。是を大蛇の骨宮ともいふ。須佐能男命、
退治し給ひし大蛇の骨を集て祭れりと云り。こより松江に出て宿れり。この
松江は鱸^{ス、キ}の名産にして、十月のころ完道湖^{ママ}より大海に下る鱸を採なり。此魚
の事神代の御典にも見えて、其名いと古きことしるへし。これにより、此処
をしも松江といふは漢国に鱸の多かる処を松江^{ス、コウ}といふ事のはなるへし。
こゝに四日はかりありて、熊野社・大庭社にまうてし。また揖夜神社に詣。
祭れる神は、須佐能男命・伊猛命、同右社美保津比売命といふもいかゝあらむ。
神代の御巻に見えたる伊布夜坂は此処の事なりといへど、此地海辺のなたら

能利刀神社

式今本能字熊に誤

平坂

古事記故其所謂黃津平坂

者出雲国伊賦夜坂也

大森大明神

式云筑陽神社

大山登嶺の事春平の言たる大山ノ記といふものに見ゆ

かなる処にて、伊布夜坂と思しき処は見えず。或云、日吉村劍大明神、祭神伊邪那岐命・大山祇命〔風土記云詔刀社式云能利刀神社〕。

この御社の山大石塁々として、伊邪那岐命、泉津平坂にて引塞給ひし千引の石なりと云〔千家俊信大人の考〕。今の神主の祖父内蔵太夫と云し人、神前に詣、泉の国に往三日過て帰れり〔現身なかく往しにはあらず魂の往しなり〕。

其故よしを人に語らず、老年に及息絶る際に始て泉の国に通ふ穴当社内に入りといふ事を語て息絶たりと云。是より、伊東村大森大明神に詣。神主浅

尾氏を訪らふ。安来の里より船に乗て、伯耆国米子に渡り大山に詣。神名式云、

大神山神社祭れる神は大己貴尊、今は大智明大権現と云。さて当山は〔前に

云、佐比女山とこの大山は国留の杵なりと風土記に云り〕西の国に類なき高

山にして、山の頂頭に登る人は、当山の院主おのか代にたゝ一度登るのみに

て、其余案内たにする人なしと云こと元享釈書といふものに見えて今も然り

と云。然るに吾友濱田人松田春平、教子ともをゐて此山のいたゞきに登りけ

るに、さらにかたきこともあらず、奇怪こともなしと云り。浮徒の輩とさま

かくさまにいひふれて、罪深き人登り得ぬといふ山の国々に多かれとも、類

ひなき富士の山すら人の登り見るに、まひて其より早き山のいかてか登りえ

さらむ。春原(マ)か倭魂のほとそこよなかりける。此山の東のかたに、かの船上

山といふは有なり。さかひの浦といふ処にきて三穂の崎にゆく。三穂の神社

三穗

和名抄美保、式云美保神社、三保の関と云、或は手間の関云
堀川百首

さりともと思ひしかとも
八雲立てまの関には秋も
とまらず

名寄師俊

みことのかしこみてそ
もろたふねこれよりみほ
のさきにつくせぬ

手間ヶ関は手間天神の有
る地にして三穗より七八
里へたてたり

に詣。このところは北海隠岐国の方にさし出たる岬にして、其処に御社はた、
せ給へり。祭れる神は一宮三穗津姫命、二宮事代主命をまつれり。此社にて
人々神主に物種を乞ふことあり。こは誰人にも大前にて五穀の種と始て桑
綿其外万物の豊作を乞祈て種を乞へは、何の種を望ても神主よりあたふるも
の粃モミなり。其粃を持帰て吾望の品を乞のみ。田畠に蒔は、粃種変て吾乞祈ま
にく生てことに豊作を得るなり。神験あやしき事ともあり「なほ当社のご
とくはしく八雲路日記（マ）」卷に云。こ、よりまた伯耆国にわたりて、赤崎
上伊勢などを過、稲積村といふあり。こは歌枕名寄に見えたる処なるへし「名
寄権少僧都光覚秋の田の稲積の里の秋風に寒けくなりぬ初かりのこゑ」。倉
石の町にいたりて、漬閑寺重阿主を訪らふ。そより御徳山に詣。山の麓に寺
天台宗二字あり。奥の院といふに詣る道は、いともけはしき巖のそひへたる
峰つたひに、木の根をふみ登り鎖をひき、或は梯を登り橋を渡り鳶にとりつ
きなど、いともあやうきからき道なり。其道すから、巖のさしのそきたる上
に、神社堂宇を造りかまへ、左右の谷はいく千尋もあらむと思しき谷の岩壁
よりたきちる水のうちけふりそゐのきはみも見えず、いともかしこし。か
らふして奥の御社に詣。人みな投入堂ナケドとなもいふ巖の簷へ覗きたる下方の奥
に御社あり。此御社には詣る人もなく、実に遠より投入たるかことし。趣な
くては詣るやうこそなかりけれ。すさもおのれもた、かしこしと仰き見たる

はかりなり。其道、次の神社は禁に拝礼殿あり。次なるは野際明神・天満宮・
勝手権現・観音堂、次々に建給ひて、いやはてに奥の御社蔵王権現なり。是
より因幡国にこえ、鷺峯山に詣。鹿野にいて、宿る。

